

アリストテレスのエンテューメーマ：レートリケーとディアレクティケー

木下 一正

アリストテレスのエンテューメーマという言葉で我々が想定するのは、ディアレクティケー（問答・対話の技術）の推論が通念を前提とするように、レートリケー（弁論・雄弁の技術）の推論はもっともらしさ、しるし、証拠を前提とすることであるとか、ディアレクティケーの推論と同じくトポスに立脚する推論であるとか、そのトポスにも、我々がトピックという言葉で慣れ親しんでいる意味でのトポスと、主題に関わりなくただ言論そのものに着目した論拠というべきもの、推論がもとづく論理学的見地というべきものがあり、エンテューメーマの多くは前者を前提とするのであり、後者から導かれるものは少ないといったことであるとか、エンテューメーマを三段論法から分析した場合には略式三段論法や省略三段論法を意味するとかであろう。しかし、エンテューメーマそれ自体がただちにその意味であるわけではない。古くはソポクレスに遡る¹エンテューメーマの第一義は、あくまでも、留意する、肝に銘じる（ἐνθυμείσθαι）という動詞と語根を同じくする、留意され、肝に銘じられた、考えや思案（ἐνθύμημα）を意味する言葉であり、アリストテレスが分析する過程で登場する説明が以上の事柄なのである²。その考えや思案を意味するエ

ンテューメーマをアリストテレスはどのようにとらえているのであろうか。しかし、それ以前に、エンテューメーマがアリストテレスのレートリケーの考察の中でいかなる位置を占めるものなのかが判然としない。たとえば、Bywater（Bywater 1909: 164）は『創作論』の註釈のなかで、アリストテレスのディアノイア（思考、知力、知能）に応じる単語は、イソクラテスではエンテューメーマであると述べている。しかし、その場合には、『創作論』でのディアノイアとアリストテレスの『レトリカ』でのエンテューメーマとの関係はどうなるのであろうか。アリストテレスのエンテューメーマとイソクラテスのエンテューメーマとは異なるものなのであろうか。他方、両者は異なるものではなく、たとえば、Wilamowitz（Wilamowitz 1925: 81）のように、アリストテレスのエンテューメーマの考察はイソクラテスに起因するとする立場もある。しかし、どちらにせよ、まず、アリストテレスが実際どのようにエンテューメーマとディアノイアを考えていたのかを考察し、レートリケーの中でのエンテューメーマの位置を明らかにする必要がある。その中から、アリストテレ

えてみるならば、問答は、問い手と答え手の考え、推論を語るのではなく、端的に推論するのであって、つまり、語るということを意識する必要はないからこそ、推論するのであるが、弁論は、考えを聞き手に語る、つまり、語るということを意識することによって、考えたことを聞き手に語るなのである。語る場合には何かを語るなのであって、その何かがエンテューメーマ、すなわち考えなのである。もちろん、その考えはより制限された、つまり、心に留めおかれ、肝に銘じられた、考えである。レートリケーは、ディアレクティケーのように問い手と答え手が推論を繰り返しながら展開していくものではなく、いわば一方的に語り手のそうした考え、思案を聞き手に語るのである。

¹ Grimaldi（Grimaldi 1972: 71）はソポクレスの『コロノスのオイディプス』に登場するエンテューメーマを単純に考え（thought）と翻訳することは可能ではないとしているが、留意され、肝に銘じられたという制限を加えた意味で用いるとするならば、エンテューメーマを考えと翻訳することは可能であると思われる。

² とりわけ、エンテューメーマの特徴をよく示している箇所は『レトリカ』第1巻1358a15である。アリストテレスは、「推論する」（συλλογίσασθαι）という言葉と「考えを語る」（ἐνθύμημα εἰπεῖν）という言い方を対応させているのである。その理由を考

スのエンテューメーマの具体的内実について洞察することが本論の目的である。

アリストテレスの『レトリカ』でのレトリケーの研究対象は三つ、すなわち、説得（πίστις）、語り方（λέξις）、配列（τάξις）である。このうち、説得に属するものであるところの、例証、格言、エンテューメーマについて、アリストテレスは『レトリカ』1403a34-b2において、ディアノイアをめぐる事柄と呼ぶのであるが、アリストテレスはこのディアノイアをいかなる意味で考えているのであろうか。ディアノイアがレトリケーにとっていかなる意味をもつのであろうか。それについて、アリストテレスは『創作論』において次のように述べる。

「これ（ディアノイア）は可能な限りのことどもや適切なことどもを語る能力であり、まさしくこのことこそ、（劇中人物の）言論に関して、ポリーティケー（政治・治国の技術）とレトリケーの仕事となるものなのである。」（*Poet.*, 1450b4-7）

「ディアノイアをめぐる事柄は『レトリカ』の中にあるとしよう。なぜなら、このことはむしろその研究分野にいつそう固有なことであるから。そして、ディアノイアに従うのは、言論によって成し遂げられなければならない限りの事柄である。これらの諸部分は証明すること、反証すること、そして、さまざまなパトス（たとえば、あわれみ、恐れ、怒り、そのような性質である限りのものども）を引き起こすことや、さらに、小事を大事のようにいい、大事を小事のようにいうことである。」（*Poet.*, 1456a35-b2）

この言及からすれば、レトリケーの研究分野に固有なこととして、ディアノイアに関わる事柄が挙げられている。そして、そのディアノイアに関わりのあるものとは、劇中人物の言論、弁論によって成し遂げられなければならない事柄なのである。それは、たとえば、証明したり、反証したり、聞き手に、あわれみ、恐れ、怒りなどのパトスを引き起こすことである。しかし、

悲劇であれ喜劇であれ、劇中人物は何かしらのことは語っているのであって、その語ることがディアノイアを示していることを意味するための他の言論との差異は何であろうか。アリストテレスはディアノイアとエートス（人となり、性格）との対比を示しながら、次のように述べる。

「エートスとは、[ある人がどのようなものを選びどのようなものを避けるかが不明な場合に]ある人がどのようなものを、という選択を明らかにするようなものである。まさにそれゆえに、エートスにはそこに語り手が何を選び何を避けるかが全くといって存在しない言論は含まれていないのである。他方、ディアノイアには何かをそうであるとかそうでないとか証明したり、何かしら自分の考えといったものを一般的に表明したりする言論が含まれている。」（*Poet.*, 1450b8-12）

エートスは、何を選び何を避けるかという選択を明らかにするものなのである。その人がある状況において何を選ぶかということによってエートスが示されるのであり、つまり、性格や人柄といったものはそのような選択を示す言論の中で現れるとアリストテレスは考えているのである。したがって、劇中人物の言論がその人物のエートスを含んだものとなるためには選択を含む言論を展開していなければならないであろう。それに対して、ディアノイアは、証明したり、相手に理解してもらえるように自分の意見や考えを表明したりする言論により示されるのである。つまり、言論にはエートスを示す言論とディアノイアを示す言論がここで区別されているのである。このことは、ちょうど、『レトリカ』第1巻で次のように述べられている。

「言論によって与えられる説得の種類は三つである。すなわち、一つは語り手のエートスのうちに、一つは聞き手を何かしらの状態にすることのうちに、一つは示したり、あるいは、示していると思われることを通じて言論そのもののうちにある。」（*Rhet.*, 1356a1-4）

証明したり反証することは、言論そのものによる説得に、さまざまなパトスを引き起こすことは、聞き手を何かしらの状態にすることに対応する。ディアノイアとは、魂の卓越性が二者に分割されるがごとく、人間の魂の一つの機能であろうが、それは、言論を語る人であれ、聞く人であれ、ディアノイアを通じて行うことなのである。弁論家はディアノイアを働かせ聞き手を説得するのであり、聞き手はディアノイアをもって説得されるのである。その場合に最も力を注がなければならないものがエンテューメーマと考えて差し支えないであろう。したがって、まず、アリストテレスのエンテューメーマは弁論家や弁論を作成する人のディアノイアをめぐる事柄の分析であると考えることができる。もちろん、このことは、レートリケーと対立しているディアレクティケーにも妥当する事柄であるとしてよいのではないだろうか。アリストテレスのディアレクティケーの推論もエンテューメーマと同様、人間のディアノイアを見つめたものであって、人間が問答する場合、証明したりする限りは、その問答している人間のディアノイアをめぐる事柄を扱ったものが推論なのではないだろうか。しかし、ディアノイアは悲劇の作成に関して述べられたものであり、ディアレクティケーの推論までもディアノイアをめぐる事柄と考える必要はないのかもしれない。逆に言えば、ディアノイアを働かせる代表的なものがエンテューメーマとも言うるのである。

言論にはエートスを示す言論とディアノイアを示す言論の二者が存在し、ディアノイアを示す言論には証明したり、反証したりすること、また、聞き手にパトスを引き起こすことの二者が存在することになる。この三者のうち、証明したり、反証したりすることがエンテューメーマに対応することになる。したがって、アリストテレスのディアノイアとエンテューメーマはある意味同一のものであると云うるかもしれないけれども、アリストテレスの語り方からすれば、ディアノイアは魂の属性の一つであり、エンテューメーマはそうではなく、そのディアノイアを示す一つの方法なのである。もちろん、

方法といっても、エンテューメーマは考えや思案を意味するのであるから、そのエンテューメーマを語るという仕方ではディアノイアを示すのである。言論とは、我々の魂を言論で示すということであり、その魂は、エートスとディアノイアに区分されるのであるから、言論にもエートスを示す言論とディアノイアを示す言論が存在し、エンテューメーマはディアノイアを示す言論の一つと云うるのである。もちろん、エートスを示す言論とディアノイアを示す言論という区別は『創作論』において妥当する事柄であり、他方、『レトリカ』では、人となりとしてのエートス、感情としてのパトス、言論そのものとしてのロゴスの三者の区別である。人物描写と言論を通じての説得という差異により『創作論』と『レトリカ』での論述の仕方は異なるけれども、アリストテレスの立場は一貫している。語り手はエートス、パトス、ロゴスの三者を考慮にいれ、とりわけ、ロゴスにより聞き手を説得する場合は説得の要となるのであり、そのとき、語り手が語るにあたり留意される考えこそがエンテューメーマなのである。

さて、レートリケーにおいて、ディアノイアを働かせ、証明したり、反証したりすることにより、聞き手を説得する場合に最も力を注がなければならないものがエンテューメーマと考えて差し支えないであろう。しかし、アリストテレスはそのエンテューメーマをいかなる意味で用いているのであろうか。それを示すテキストの根拠のうち『レトリカ』第1巻1355a3-14が重要な典拠となる。もちろん、それは「ある種の推論」の解釈いかんという条件つきである。特に、この「ある種の」という言葉の曖昧さは Burnyeat (Burnyeat 1994: 13-15, 1996: 94-96) によって提起された問題であるが、それと同様に、推論の解釈もまた問題であり、エンテューメーマを、いわゆる省略三段論法と訳すことも、この「ある種の推論」の解釈次第という面を備えている。

「技術に属する方法は説得をめぐってあり、他方で、説得はある種の証明であるが（なぜなら、我々が最も信じるのは証明されている

と解する場合であるから）、ところが、レートリケーの証明はエンテューメーマであり、そして、これは端的に言えば説得のうち最も力を持っているものである、ところが、エンテューメーマはある種の推論である、しかしながら、同様にあらゆる推論について観察することは、ディアレクティケーに属しており、全体であろうとある種の部分であろうと、そうなのである、以上のことゆえに、推論が何にもとづき、そして、どのように生じるのか、このことを考察することができる人、この人こそはエンテューメーマにも最もよく精通した状態でありうることは明らかである、なぜなら、彼こそは、エンテューメーマはどのような性質の事柄に関わっており、ロゴスに関わる推論と比べてどのような差異を持っているのかどうかを傍らに備えている人だからである。」（*Rhet.*, 1355a3-14）

技術に属する方法は説得に関わるという主張は、レートリケーの後世の訳語にもなった、修辞学に代表される修辭的側面に対立して述べられている事柄であり、つまり、語り方であるとか言葉の技巧であるとか、序論、主題提起、説得、結論という配列を主要な問題にしている従来のレートリケーに対する批判なのである³。それをレートリケーの本来の技術には属さないものとアリストテレスは考えているのであり、レートリケーが技術として関わる対象は説得である、と述べるのである。そして、次に、ディアレクティケーとの関係に配慮しながらレートリケーの説得について説明していく。まず、説得はある種の証明である、とアリストテレスは述べる。この証明に「ある種の」という言葉を付け足すのである。そして、我々が信じるのにも様々な程度があるが、その中でも相手によって証明されている場合を我々が信じる最大の原因とする。レートリケーに関わる証明はエンテューメーマであり、そして、これは端的に言えば説得のうち最も力を持っているものであるとアリストテレスは述べているのであるが、説得する場合に

³ これらは『レトリカ』第3巻で考察されるものである。

最も力を持つのは何かと考えた場合、語り方であるとか、配列の仕方ではなく、もちろん弁論家がどう考えているか、ということであろう。この弁論家の考えこそがエンテューメーマなのであって、弁論家がどのように考えているのかということにより、我々はその弁論家の意見に賛成したり反対したりするのである。そして、その弁論家のエンテューメーマ、すなわち、考えがある種の推論であるとする⁴。「ある種の」という言葉が付け加えられるのは、ディアレクティケーにおいて推論であるものが、レートリケーにおいてエンテューメーマであるとするものである。

しかし、ここで問題が浮上する。つまり、「ある種の」（τις）という何気ない言葉と、推論（συλλογισμός）という、いわゆるアリストテレスの専門用語と考えられうる言葉の意味である。「ある種の」という言葉に関しては、推論の一種と考えるのか、それとも、推論のようなものとするのかという曖昧さが浮上するのである。もし、推論の一種と考えるならば、証明という類の中に種である説得が考えられ、推論という類の中に種であるエンテューメーマを考えることになる。それについては、さしあたり、アリストテレスがエンテューメーマを定義している次の文章が参考になる。

「例証とエンテューメーマの差異が何であるのかは『トピカ』から明らかである（なぜなら、そこで推論と帰納についてあらかじめ述べられたからである）、つまり、一方で、多くの類似したものどもに立脚して事実そのようであるということを示すことがディアレクティケーにおいては帰納であり、レートリケーにおいては例証である、他方で、あるものどもがある場合に、何か別のものが、それらによってそれらとは別にそれらがあることによ

⁴ たとえば、プラトンのレートリケーについての態度は『ゴルギアス』や『パイドロス』に集約されていると考えられるが、仮にアリストテレスの『レトリカ』と比較した場合、特にアリストテレスに固有な事柄として目に映るのは、レートリケーとディアレクティケーの関係を推論という点で分析しているということである。

て、普遍的にせよ多くの場合にせよ、帰結することが、ディアレクティケーにおいては推論であり、レートリケーにおいてはエンテューメーマである。」（*Rhet.*, 1356b10-17）

これが『レトリカ』でのエンテューメーマの定義であり、ディアレクティケーの推論の定義でもある。この定義からすれば、「あるものどもがある場合に」と語られている以上、少なくとも、エンテューメーマが一つの前提ではなく、二つ以上の前提を持つことは明らかであろう。ところが、この『レトリカ』での定義と『トピカ』での推論の定義とは異なっている。『トピカ』での推論の定義は次のものである⁵。

「それでは、推論は、その中であるものどもが措定された場合に、措定されているものどもとは何か別のものが、措定されたものどもを通じて、必然的に帰結する、ロゴスである。」（*Top.*, 100a25-27）

『トピカ』の定義と『レトリカ』の定義には、二つの際立つ相違がある⁶。一つは、「あるものどもがある場合に」に対して「あるものどもが措定された場合に」という条件文であり、もう一つは、「普遍的にせよ多くの場合にせよ」に対して「必然的に」という副詞句である。前者は、レートリケーの推論が何かについての事実に基づくものであり断言的なものであるが、ディアレクティケーの推論は、問答のために、あるいは、それらが答え手に受け入れられうるものであるために、単に提出された前提に基づくとい

⁵ この定義はまた、『トピカ』とは、「それらがあることによって」という点と「措定されたものどもを通じて」という点との相違を除いて、『分析論前書』にも見出しされる。

「推論は、その中であるものどもが措定された場合に、措定されているものどもとは何か別のものが、それらがあることによって、必然的に帰結する、ロゴスである。」（*An. Pr.*, 24b18-20）

⁶ Burnyeat (Burnyeat 1994: 13, 1996: 94) による「ある種の推論」の問題提起も、この『レトリカ』と『トピカ』の推論の定義の解釈に基づいたものである。Burnyeat (Burnyeat 1994: 15-19, 1996: 96-99) によれば、エンテューメーマと推論、そして、例証と帰納は定義において同じであり、『レトリカ』のこの箇所は、それを示している場所であるとする。

う違いがある。後者は、「普遍的にせよ多くの場合にせよ」という言葉が、推論の普遍性と蓋然性を示すものであり、必然的に帰結するだけでなく、エンテューメーマは、諸前提があることによって、多くの場合という仕方でも帰結するというを示している⁷。

この箇所から、ディアレクティケーの推論とレートリケーの推論であるエンテューメーマが同等に扱われていることにより、『レトリカ』第1巻1355a8の「ある種の推論」を推論の一種という意味で考えることをせず、推論のようなものと考えられることができるかもしれない。しかし、推論の一種と考えることもまた可能であるように思われる。確かに、エンテューメーマの定義に関しては推論のようなものと考えの方が適しているように見えるが、特に『レトリカ』第1巻1355a8に関して、推論のようなものとして読むには疑問が生じる。なぜなら、そのすぐ後に「あらゆる推論について」という言い方をしていることが困難を生むからである。というのも、「あらゆる」という言葉がある点が、「ある種」という言葉を、たとえ種類という関係概念で捕えないとしても、推論の部分的なものとして考えることが通常の理解であるように思われるからであり、もし、アリストテレスがエンテューメーマを推論のようなものとして考えているとしたら、この箇所に「あらゆる」という言葉を挿入することはなく、ただ「推論について」（περί δὲ συλλογισμοῦ）と述べたように思われるからである。しかし、その解釈をとるとすると、「同様にあらゆる推論について観察することは、ディアレクティケーに属しており」とアリストテレスが述べる場合に、「あらゆる推論」という言葉でアリストテレスが何を念頭に置いていたかが問題となる。ディアレクティケーの推論については、『トピカ』において推論が三つ、すなわち、(1)「論証」（ἀπόδειξις）⁸、

⁷ Grimaldi (Grimaldi 1980: 50), Burnyeat (Burnyeat 1994: 18, 1996: 98), Barnes (Barnes 1995: 271) を参照。特に、Burnyeatによって、この箇所の推論の定義における明らかな緩めがアリストテレスによる意図的な試みであることが指摘されている。

⁸ 「論証」については、次のように説明されている。

「ところで、論証であるのは、推論が真にして第

(2) 「問答・対話的推論」(διαλεκτικός συλλογισμός)⁹, (3) 「争論(問答競技)的推論」(ἐριστικός συλλογισμός)¹⁰ (Top., 100a25-101a4) に分類され記述されている¹¹。これらを指してアリストテレスは「あらゆる推論」と述べているのかもしれない¹²。しかし、そうする

一のものどもに基づく場合、あるいは、それらがある第一にして真なるものどもを通じてそれらをめぐる認識の元(はじめ)を把握した、そのようなものどもに基づく場合である」(Top., 100a27-29)

⁹ 「問答・対話的推論」については、次のように説明されている。

「そして、問答・対話的推論であるのは、通念に基いて推論するものがそうである。」(Top., 100a29-30)

¹⁰ 「争論(問答競技)的推論」については、次のように説明されている。

「争論(問答競技)的推論であるのは、実のところ通念ではない見せかけの通念に基づくものであり、また、通念や見せかけの通念に基づく見せかけの推論がそうである。」(Top., 100b23-25)

¹¹ 『トピカ』第1巻101a5-17で記述されている誤謬推論(παραλογισμοί)も含めると考えた場合、『トピカ』では四つの推論が語られていることになる。しかし、誤謬推論はその名が示す如く、誤謬の推論であるから推論ではなく、アリストテレスが推論と呼ぶのは厳密に言えば三つであり、また、「争論(問答競技)的推論」についても、通念や見せかけの通念に基づく見せかけの推論は推論ではないとしている。

「ところで、語られた争論(問答競技)的推論のうち前者(事実通念ではない見せかけの通念に基づくもの)は推論でもあると言うにしても、後者(通念や見せかけの通念に基づく見せかけの推論)は争論(問答競技)的推論であるが、しかし、推論ではない、なぜなら、推論しているように見えるが、しかし、推論してはいないからである。」(Top., 101a1-4)

¹² 『トピカ』第8巻において、アリストテレスは次のようにも述べている。

「問答相手によって語られた言論(主張)が何かの証明である場合に、もし、その何か結論にかなる仕方であれ関係しない他のものであるならば、その結論については(何かに基づいた)推論が存在しないことになるだろう。たとえそのように見える場合にして、詭弁の推理であり、証明ではない。哲学の推理は論証的推論であり、吟味(試み)の推理は問答・対話的推論であり、詭弁の推理は争論(問答競技)的推論であり、アポリアの推理は矛盾の問答・対話的推論である。」(Top., 162a12-18)

しかし、この箇所は、Smith (Smith 1997: 144) によれば、アレクサンドロスが読んでいないことを取り上げ、「それら(162a15-18)はおそらく後の編纂者の傍注であろう」と言っている。しかし、この箇

と、「ディアレクティケーに属しており」という言葉が不可解なものとなる。(2)の「問答・対話的推論」がディアレクティケーに属していることは理解できるとしても、(1)の「論証」と(3)の「争論(問答競技)的推論」、特に、

(1)がディアレクティケーに属しているということはディアレクティケーの範囲を超えたものをもまたディアレクティケーに帰することになるからである。それゆえ、『レトリカ』に登場する、特に、この箇所のディアレクティケーは『トピカ』ではなく『分析論前書』に相当するもののように解釈することも可能となる¹³。

しかし、「あらゆる推論」とアリストテレスが述べる時、それは、上記の三つの推論のことを指していると解釈すること自体に、実は、躓きがある。アリストテレスが「同様に」

(ὁμοίως)と述べていることに注意しなければならない。「同様に」と言う限りは、レトリケーと同様ということであり、「あらゆるエンテューメーマについて観察することは、レトリケーに属しており」という前提に立つことによつて理解可能な言葉となるのである。したがって、それに応じて、ディアレクティケーが取り扱うのは(2)の「問答・対話的推論」と考えなければならない¹⁴。とりわけ、アリストテ

所からもまた、推論には、論証的推論、問答・対話的推論、争論(問答競技)的推論の三つがあることには変わりない。

¹³ Grimaldi (Grimaldi 1980: 22) は『トピカ』のディアレクティケーと解することに困難を示している。また、Gohlke (Gohlke 1959: 243) は、「驚くべきことは、あらゆる推論と推論様式の研究はまさにディアレクティケーに割り当てられ、このディアレクティケーは、実際、論理学=『分析論』の立場から、真理ではなく蓋然性に関わっているものであり、ちょうどここでのレトリケーのようである。これが理解されるのは、ここでのディアレクティケーがなおプラトンの意味で最高の学問として把握された場合にのみであり、また、この節が生じたことが理解されるのは、ディアレクティケーがアリストテレスにとってもなお同じ意義を持っていたときである。」と述べている。

¹⁴ もちろん、争論(問答競技)的推論を含むと考えてもよいであろう。それゆえ、アリストテレスはディアレクティケーについて、「全体であろうとある種の部分であろうと」と語っているのではないだ

スが『レトリカ』第1巻の冒頭で「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」と述べた限りはそう考えなければならないであろう。というのも、聴講生はその言葉を冒頭で聞いているのであるから、アリストテレスが、『レトリカ』で推論という言葉が語れば、ディアレクティケーの推論、つまり、問答・対話的推論を想定するだろうからである。というのも、「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」とアリストテレスが冒頭で語るとき、アリストテレスは、もちろん、片方のレトリケーのを中心に述べようとしているのであり、ディアレクティケーのを中心に述べようとしているのではない。「対になっている」という言葉は、二つのことが言いたいのではなく、少なくとも片方は厳密ではないにしろ聴講者には知られており、もう一方の説明をこれからすると考えるのが自然である。それゆえ、アリストテレスは、ディアレクティケーを少なからず理解している聴講生に向かって、「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」

らうか。それは、アリストテレスが「あらゆる推論について観察することは、ディアレクティケーに属しており」と述べたときに、この箇所に関して、問答・対話的推論と争論（問答競技）的推論の両者の考察をディアレクティケーに属するものとするのか、それとも、片方の問答・対話的推論のみをディアレクティケーに属するものとするのかという考慮があったからではないかと思われる。アリストテレスは、ソフィストを規定している文脈で、説得と見せかけの説得、推論と見せかけの推論について次のように述べる。

「これらに加えて、明らかなことは、説得と見せかけの説得とを観察することは同じ技術に属するのであるが、それはちょうど、ディアレクティケーについてもまた、推論と見せかけの推論を観察することが同じ技術に属するようにである。なぜなら、ソフィストの技術は能力の中にはなく選択の中にあるからである。ただし、レトリケーにおいては、学知に従う人も選択に従う人も弁論家であるのに対し、ディアレクティケーにおいては、選択に従う人はソフィストであり、他方、選択に従うのではなく能力に従う人は問答家である。」

(*Rhet.*, 1355b15-21)

この箇所によれば、問答・対話的推論と、見せかけの推論である、争論（問答競技）的推論の両者の考察をディアレクティケーに属するものとしている。アリストテレスが「あらゆる推論」と述べるときには推論と見せかけの推論とを考えているのであるから、問答・対話的推論と争論（問答競技）的推論の両者を考えた方が適切であろう。

と語りかけたのである。そのディアレクティケーの推論のことがこの箇所でも述べられるのである。

したがって、エンテューメーマを考察するのはレトリケーに属し、推論の考察はディアレクティケーに属するのであるから、確かに、「ある種の」という言葉には、厳密に種という規定を適用しないように注意しなければならない。では、「ある種の」という言葉をアリストテレスがなぜ使ったのかのであろうか。よく注意して著作を読むならば、『レトリカ』第1巻1354a14において、また、『レトリカ』第1巻1354b22においてエンテューメーマという言葉を用いながら、それをレトリケーにとって重要なものであることを示した後、エンテューメーマという言葉がアリストテレスが説明し始めるのはこの箇所なのである。しかし、アリストテレスは、『レトリカ』の聴講生、あるいは学び手がエンテューメーマを少なからず知っているものとして話を進めている¹⁵。もちろん、エンテューメーマを学び手が深く考えているかどうかは別の話である。ここでは、アリストテレスは、エンテューメーマが少なからず知られていることを前提にしながら、「エンテューメーマはある種の推論である」と述べることによって、学び手に対して、説得において重要なものであるエンテューメーマに注意を促していると考えてよいということである。そして、その聴講生は、ディアレクティケーの推論についてもまた知っているとしてよい。というのも、『トピカ』第1巻の冒頭で推論の説明を加える必要があったアリストテレスが、『レトリカ』においてその説明を必要としない理由は、厳密な意味であるにせよ、おおよその意味であるにせよ、すでに何らかの意味で知られているということ以外には考えられないからである。それは、『レト

¹⁵ Burnyeat (Burnyeat 1994: 10, 1996: 91) は次のように述べる。「我々は推論についてほとんど知らず、さらに、三段論法についてはもっと知らないかもしれない、しかし、アリストテレスが予期しているのは明らかに我々がエンテューメーマという言葉に慣れ親しんでいるか、もしくは、少なくともその意味のざっとした考えを持っているということである、というのも、アリストテレスはその言葉を『レトリカ』1354a11-16で用いるときいかなる説明もしていないからである」

リカ』第1巻の冒頭での「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」という言葉をアリストテレスがなぜ『レトリカ』第1巻の冒頭に位置付けているのかということに対する答えとも言うるであろう¹⁶。しかし、エンテューメーマは推論として考えられていなかった、少なくとも、アリストテレスの『レトリカ』の聴講生には、想像はついてははつきりとはそう思われていなかったとしてよいであろう。つまり、エンテューメーマは推論ではなかったのである。その推論ではないエンテューメーマをディアレクティケーの推論との比較によって考察するために、アリストテレスは『レトリカ』第1巻の冒頭で「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」と述べる必要があったのである。ディアレクティケーについてはある程度知っている聴講生は「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」というアリストテレスの言葉に対して驚きを感じたに違いない。哲学的議論の訓練のためにはディアレクティケーを学ぶ必要があるがレトリケーはそれほど学ぶべきものと考えていなかった聴講生は、特に驚いたのではないだろうか¹⁷。そのような聴講生を相手にして、「レトリケーはディアレクティケーと対になっている」と語ることに、レトリケーの具体的内実がどのようなものであるのかをアリストテレスは明示する必要があった。そのアリストテレスが表明した

¹⁶ アリストテレスは『レトリカ』の冒頭で述べる「レトリケーはディアレクティケーと対になっている。」(Rhet., 1354a1)について言えば、レトリケーとディアレクティケーはその主題というものを持っているのではなく、その主題について、弁論したり、問答したりする、すなわち、言論を生み出すという点において対になっているのであるが、その一文が『レトリカ』全体の冒頭になぜ位置付けられたのかという問いに対する答えということである。

¹⁷ アリストテレスは『トピカ』第1巻101a25-b4において、ディアレクティケーは三つのことに関して(πρὸς τρία), すなわち、知的訓練に関して(πρὸς γυμνασίαν), 話し合いに関して(πρὸς τὰς ἐπιείκας), 哲学的学知に関して(πρὸς τὰς κατὰ φιλοσοφίαν ἐπιστήμας), そして、ディアレクティケーに固有な、あるいは最も特徴的であるものとして、各々の学知をめぐる事柄のうち第一の事柄に関して(πρὸς τὰ πρῶτα τῶν περὶ ἐκάστην ἐπιστήμην), 有用であると述べている。

言葉、それが「エンテューメーマはある種の推論である」というものなのである。そのことにより、アリストテレスは、エンテューメーマ、すなわち、弁論家の考えをディアレクティケーの推論と比較することによって、エンテューメーマがどのような推論であるのかを考察することになるのである。

参考文献一覧

- Aristoteles 1959: *Rhetorik*(Die Lehrschriften des Aristoteles). uebertragen und in ihrer Entstehung erlaeutert von Dr. P. Gohlke. Paderborn: Schoeningh.
- Barnes, J. 1995(repr. 1999): "Rhetoric and Poetics." In *Cambridge Companion to Aristotle*. ed. Jonathan Barnes. Cambridge: Cambridge University Press. pp.259-285.
- Burnyeat, M. F. 1994: "Enthymeme : Aristotle on the logic of Persuasion." In *Aristotle's "Rhetoric" Philosophical Essays*. ed. David J. Furley and Alexander Nehamas. Princeton: Princeton University Press. pp.3-55.
- Burnyeat, M. F. 1996: "Enthymeme : Aristotle on the Rationality of Rhetoric." In *Essay on Aristotle's "Rhetoric"*. ed. Amelie Oksenberg Rorty. Berkeley: University of California Press. pp.88-115.
- Bywater, I. 1909: *Aristotle on the Art of Poetry*. Oxford: Oxford Clarendon Press.
- Grimaldi, W.M.A. 1972: *Studies in the Philosophy of Aristotle's Rhetoric*(Hermes Einzelschriften 25). Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Grimaldi, W.M.A. 1980: *Aristotle RHETORIC I A Commentary*. New York: Fordham University Press.
- Smith, R. 1997: *Aristotle Topics Book I and VIII*. Oxford: Clarendon Press.
- Wilamowitz-Moellendorff 1925(repr. 1958): *Menander Das Schiedsgericht*. Berlin: Weidmannsche Verlagsbuchhandlung.

(きのした かずまさ, 広島大学大学院 [哲学])